

抑留日誌から

茨城県 初鹿野 清

一、リーダー收容所入所初夜 南京虫大群の掃討作戦

昭和二十（一九四五）年八月九日、遼陽予備士官学校教育訓練中ソ連軍侵攻、学校は解散。国境の孫呉部隊復帰を命ぜらるるも、ハルビン以北は戦場となり列車運行不能、ハルビンの臨時混成旅団に配属となり、そこで終戦を迎える。

同年八月十九日武装解除、貨物列車輸送、徒歩行軍などにより荒野の放浪の後、海林收容所・牡丹江收容所の抑留生活。

同年十一月三日、牡丹江貨物駅発車、ウォロシーフ・ハバロフスク経由、オムスクよりローカル線で終着駅リーダー着、一カ月近い長途の旅を終え、終着駅に到着したのは十二月一日午後十時、吹雪の夜であ

る。

同年十二月二日、リーダー收容所入所。

話を駅到着時から始めよう。

「命令。夜の明けるのを待って下車、それまで車内で二食分の携行食を準備。ラーゲルは森林の中の道を歩いて西方へ約五キロメートル、ラーゲルに入る前に私物検査あり、病人は第六号車に通報すること。今晚、いや明日夕食からラーゲル給与。また、こんなことを情報として知らされましたのでお知らせします。ここはリーダーという町だそうです。ラーゲルは森林の中、町は駅から東の方向。なお、このラーゲルには、ドイツ、イタリア、ハンガリー、オランダ等、かつての同盟側の捕虜が約一千人いるそうです。それから、関東軍の先着部隊も来ていて、我々を待っているそうです」命令受領にいった岸本少尉の粉雪をかぶった姿に、三十人の兵隊たちはかたずをのみ、石像のように聞き入っていた。

不安と緊張は幾分ほぐれた。夜が明けてから下車する。先着の関東軍兵士達が我々を待っているという、

知っている友達がいるかもしれない。一応、生きているだけでもいい。安定した生活体制の中で我々を迎える意味での「待っている」なのであろうか、それとも、不安や絶望にあえぎながら、戦友を慕い求める意味での「待っている」なのであろうか。

車内では、最後の自炊とあって、持参したとおきの玄米を炊くことにした。「とつときの米の飯、いよいよ炊くんかい、すごいぞ」「焦がさんように、なあ当番、しっかり頼むぞ」「心配すんな、腕によりをかけるって、高粱や粟ならともかく、誰がもったいなくて焦がすかい」とばかり、車内は米の飯を炊くことで活気がよみがえっていた。

石油缶にとっしりと炊きあげた二食分の米の飯を担い、雪の降りしきるホームに下車したのは、幾分空が白みかけた午前五時三十分であった。しかし、隊列が移動し始めたのはなんと三時間後である。ふぶく凍えるような暗い寒さの中で三時間もの立ちん坊であった。「せつかく炊いた飯……、もうあかん、すっかり冷えてしもた」八木が額に汗して炊きあげた石油缶

いっぱい飯も、周りの雪を溶かし、しばらくは湯気とふくよかな匂いを漂わしていたが、それはもうなくなっていた。兵隊たちは寒さとの戦いを余儀なくされ、足を動かし、体を動かす以外に鋭い寒気をかわす方法はなかった。

何時に駅を発出するのか、逆算して二十分もあれば十分である。それまで車内で待機させるといった知恵はないのか。待たされるソ連方式は毎度のことだが、言い知れぬ恐怖感と憤りをまたあらためて思い知らされた。

夜はすっかり明け、吹雪も大分おさまっていた。視界もひらけ、初めて見るヨーロッパシアの小さなラーダー駅、雪のヴェールをかぶった大森林に囲まれた、インソップ物語に出てくるようなきこり小屋、そんな感じの建物であった。

「グオーググオーグ」とすさまじい汽笛を辺りにこだまさせて列車は動きだした。私たちが二十八日間、生命を託して来た長い長い貨物列車が駅を去っていく。一両一両に、それぞれの思い出の断片を刻んだこ

とであろう。去り行く巨大な列車、再び私たちに必要となる日は果たしていつの日であろうか、兵隊たちはそれを熱い視線で見送っていた。

雪も小降りとなり、風もないようであった。かなり広い野原が広がっていたり、白樺や赤松の疎林が続いたり、道路に沿って素朴な民家が並んでいたりと、全くの田舎の風景であった。肉眼でもはっきりわかるほどの雪の結晶が音もなく舞い降りていた。

太陽が低い位置で南の空を移動しており、時々林の樹間に朧月のように顔をのぞかせていた。地平線との視角が十五〜六度くらいの高さで、時刻は九時半である。モスクワ標準時だから、多少はずれがあるにしても、北緯五十度以北に間違いはなさそうである。

駅から一時間ほど歩いたろうか、赤松林の前方が明るく見えてきた。道路の右側が広い草原で、その草原のかなたに、有刺鉄線を幾重にも張り巡らした収容所らしい施設が見えてきた。

海林や牡丹江の収容所にも有刺鉄線は巡らされていたが、その鉄柵は物々しく、要所要所には警戒兵の望

楼もあった。白樺や落葉雑木がまばらに生えており、その木立の陰に低い屋根のブラックが軒を並べていた。

紛れもなくリーダー収容所到着である。先頭が収容所の入り口へ到着すると隊列は停止した。草原は風が吹き荒れるためか積雪のない所があった。兵隊達は休止の指示も待たずに争うようにそこへ散った。だが、凍結した大地は待ち構えていたように衣類を通して男達の体温を吸収し始めた。「だめだ、尻が凍りついちゃうよ」兵隊たちは慌てて雑囊や背囊を敷いて座り直した。「各車両ごとに朝食にして下さあい」指揮班からの指示があり、私たちはそこで食事をとることにした。新しい生活環境を目の前にして、異様な緊張に忘れかけていた飯である。「おおい、十四号車、飯にするぞ！」八代が叫んだ。兵隊たちは石油缶の所へわらわらと集まった。生きることにはまず食うことである。兵隊たちの目は野生の獣のように光っていた。

飯はすっかり冷えていた。しかし、それぞれの食器に白い飯が盛り分けられると、満ち足りた表情で三々

五々仲間を作って食べ始めた。何十日かぶりの祖国の味であった。冷たかった。しかし、それにもまして甘くうまかった。ほろ苦い岩塩をかじりながらの米の飯、目にはかすかに涙さえ浮かべて私も食べた。自分の口を疑うほど、米の飯がこんなにもうまいものかと思った。

北国の冬の落日は早かった。私たちが入所の身体検査を始めたのは午後四時過ぎ、日はとつぷりと暮れ、細雪がまた降り始め、寒さも一段と厳しくなってきた。いた。

いよいよ私の順番、ソ連兵も疲れたと見えて大分いい加減な検査になってきた。そのソ連兵は私の上衣、ズボンのポケット、全部調べたが、上衣の胸ポケットから成田山のお守りを取り出した。「チトータコイ？（これは何だ）」私は返事に窮した。そして、とつさに両手を合わせて拝むまねをした。「カミサマダー（神様か）」「ダーダー」私は大げさにうなずいて見せた。ソ連兵は割に丁寧なポケットへ入れてくれた。「ニチボーニエト ハラショウ」と、そういつて

次の検査にかかった。私は無事にパスしたのである。

三十人グループの検査が済むと、私たちはゲルマンスキーの先輩に案内されて所内を歩いた。

第七十四号バラックであった。収容所の西端、鉄条網のすぐ近くである。バラックの中は真っ暗であった。黒い影と黒い影がぶつかり合いながら、手さぐりで落ちつく場所をみつめ、そこへ荷物を置いてひとまず腰を下ろした。隣へ誰が来たかわからない。

「おい、名を名乗れや」水沢の声だ。「中岡」「八木どっせ」「初鹿野」

一升約一坪に四人である。他のグループで何か燃やしたらしく、バラックの中がほのかに明るくなった。後から続々と入って来る者もあり、黒い彫塑のような人間像が幾つも映し出されて見えた。なにか不気味ですらあった。

バラックの中は幅が約十メートル、一メートル程の通路が両側に二つ、それを挟んで一坪ほどの升が四列に二段装置で縦に十二列、升の数は九十六もあった。四人ずつで定員三百八十四人という大変な収容能力で

あった。出入り口は南北に一つずつ、その出入り口の所に三坪ほどの空間があり、煉瓦積みめのベチカがあった。便所は外。人間が眠るだけの機能を備えているに過ぎなかった。

「この土室の中に、一個中隊が入ってしまう、もっとも人間だけだが」水沢が驚いたように言った。「まるでお蚕さんみたいやぜ、人間のバッテリー飼いだよ、これじゃあ」八木が嘆息を漏らした。しかし、列車の中よりは少し広い。頭足交互に寝る必要はない。「変な匂いがあるやないか初鹿野、南京虫みたいやぞ、な……」八木が言った。「カビの匂い、埃の腐った匂い、いろんな匂いがあるな。南京虫も確かにいるぞ」八木の嗅覚だけでなく、異様な悪臭が漂っていることは誰も気がついていた。「南京虫のようだけど明かりをつけてみんことにゃ分かんない」水沢も靴の紐を解きながら言った。

隣の升で明かりをつけたので二段装置の住居の様子がはっきりした。屋根裏には直径十センチメートルほどの丸太が敷き詰められ、その上は土が載せてある。

それがすぐ頭の上から中央の升の上に三十度くらいの勾配で伸びていた。「雨が漏るだろうな、こんじゃ」「何かしつとり濡れてますよ」皆明るく照らしだされた天井を仰いだ。丸太の間からは黒い土が今にも落ちそうにのぞいていた。「顔に何か当てて寝なかったら、土が落ちこちるぞ」「おい、二階の人よ、静かに動いてや、こっちはもうとくに埃が舞い降りてんねん」下の升からの声である。「すんまへん、落とすつもりやあらへんぜ。落ちるだけ落ちたらもう心配ないよ、屋根裏の土は二階で引き受けるからよう、ちつとは我慢してえな」八木が下をのぞいて言った。「そういうお前は八木かよおい、どこへいったかと思っていたら、今度は貴様お上がりか、どたんばたんやりおったら、足もって引きずり落とすさかいな、注意しといてや」「物騒なこといわないでな八代、ごくおとなしうしているからよ、ここは下の方が特等席やで、すぐ靴ははけるし、新鮮な空気は先に入ってくるし、今に交替してやるから」八木と八代が上と下にいると、また張り合いがあつて面白い。貨車輸送中も二人は常に冗

談を言い合って、雰囲気を明るくしていてくれた。

二人が言い合っている間に、隣の升で何か発見したらしく、とんきょうな声が起こった。「うわあ、すげえよおい、南京虫が鈴なり」「やっぱりおったか」果たせるかな、私もその明かりのかざされた屋根裏のくぼみを見詰めた。そこには、大小さまざまな南京虫が、数百匹も固まって、丸太と丸太の接続部の溝に入り込んでいた。私は背筋がぞうっとして、一瞬目まいがした。「こりゃたまらん、今夜は眠れんぞ。こいつらに刺されてみろ、虱どころの騒ぎじゃないぞ」私は、かつて牡丹江の収容所で刺されたことがあった。しかし、その時は匂いも正体も確認するところまではいかなかった。

空き家の中で半ば冬眠状態にあった彼らは、明かりと人間どもの血の匂いに覚醒したものか、もそもぞと集団を解き行動を起こし始めていた。すばしこく足の早いのもいれば、大儀そうに大きな体を動かししているもの、そそっかしいのはぼろんと下へ落ちたりもした。「畜生奴！ 今度はこいつらが俺たちを悩ますの

か」水沢は憎しみを込め、舌打ちをして言った。

「おうい、南京虫がすごいぞう！ みんなして退治せんと……」隣の升から、バラック内に緊急警報が出された。バラック内は、すわっとばかり、ハチの巣を突つついたように色めき立ち、各所に火が灯った。私達の血を狙う伏兵がここにもいたのである。その数、バラック内で数万匹を数えるであろう。一匹か二匹でも眠れなかった牡丹江のことを思い、私は慄然として背筋が凍る思いであった。バラック内は、南京虫退治一色となった。炎を掲げて敵影を追い求める血走った男達の目が異様な緊張を作った。炎で焼き殺された死骸は床の上に落ち、悪臭が充満した。

私達の升の天井にも、同じような大集団がいくつかにいた。水沢は、炎で焼き殺す戦法でなく、まず厚紙ですりつぶした。その悪臭は格別であった。丸太は血しぶきを当てたように赤黒い虫の血で汚れた。集団から離れ、クモの子を散らすように逃げ惑う……それを追って炎がゆらめく……相手を凝視し、そして追い詰める男達のまなざしは、真剣そのものであった。

時ならぬ野戦に、兵隊達は旅の疲れも忘れたかのようであった。敵に遭遇したときのすさまじい闘争本能、それが目覚め、燃えたぎっている様子は、戦後以来見たことはなかった。

落莫、疲労こんばいの極限に追い詰められてここまでたどり着き、手足を伸ばしてゆっくり休もうとしたやさき、この南京虫の大群は憎みて余る許さざる敵であった。たかが相手は虫けらであっても、その脅威は尋常ではない。

「おい、埃は落としても、虫は一匹も落とすなよ」下からの声である。「下でいぶすから、みな上へ逃げきよるぞ。焼き殺せよ、香ばしい匂いにするやないか」八木も負けずに答える。「火炎放射器も、燃料がなくなった。奴さん、今夜は驚いて来ないよ、みんな火傷したろうから」水沢が言った。

南京虫掃討作戦は、燃料がなくなり休戦に入ったようであった。夜討ちのかがり火は、急に寂しくなった。焦げ臭い匂い、南京虫の死骸の匂い、しかしバットの中は急速に静かになっていった。兵隊達は、

深い眠りに誘い込まれていくように横になり動きはやんだようであった。生き残った南京虫どもが、三百五十余人に分散攻撃をかけてくることは必定だが、兵隊達は深く深く眠るであらう。北国の夜は長い……。

私は用を足しにバットの外へ出てみた。雪はやみ、まばらな白樺の梢を通して、はるか遠くの空にオリオンの三つ星が冷たく瞬いていた。

二、輸送基地カザンで

昭和二十二年十月十八日、エラブカ収容所の私達技術中隊にもダモイの命令が下った。ラーゲルの大部分の人達は、再びシベリア鉄道キツネル駅までの八十キロメートルを歩いた。最後のダモイ組となった私達は、病弱者と一緒にカザン市まで、カマ河を下りボルガ河を遡る二昼夜の船旅であった。

カマ河はボルガ河の支流、エラブカ市はこのカマ河沿いの町で、埠頭が設置されている。船の上から眺めたカザン市の景観は、ボルガの青い流れと豊かな自然、それに古い歴史のたたずまいと近代とが見事に調

和した美しいものであった。だが、港から少し入った貨物駅の広大な引込線の一隅は、それとは対照的にいかにも不潔であった。広い構内なので管理の手が届かないのであろうか。いずれにせよ、抑留日本兵の輸送基地ということであれば、その不潔の張本人は日本人である。致し方ないことであった。好んでそうしている訳ではなかった。かつての牡丹江貨物駅ほどではないが、この歴史と名だたるカザン市の一面を汚しているのは、紛れもなく日本人であった。この地区の抑留者たちは、不本意ながら立つ鳥跡を濁さざるを得ずして旅立っていったのである。

その引込線に、型の不揃いな長い貨物列車が入っていた。二段装置の長距離人間輸送列車である。ウラル山脈を越え、再び雪のシベリア大平原を走ってナホトカ港まで一万キロ、気の遠くなるような距離である。ここまで来たのだ、倒れちゃいけない。祖国の土を踏み締めるまでは……、私達はそんな思いを巡らしていた。

変わりやすい天気である。雲が出てバラバラと音を

立ててみぞれが降り始めた。底冷えのする北国のたそがれである。船の中の蒸気パイプが通っていたあの機関室脇の通路が慍しかった。私達の身辺には、寒さという厳しい現実が再び取り巻いていた。

その夜は貨物の中で過ごした。かりそめの宿舍であった。ストーブは設置されていても石炭はなかった。着のみのまま、窮屈な空間の中で身を擦り寄せあつて眠った。日本へ帰る、その道程には当然予想される生活場面であった。一日千秋の思いで待ち望んでいたことが今実現したのである。誰も愚痴は言わなかった。むしろ心の中で喜びをかみしめていた。そして一刻も早く列車が動き出さないものと念じていた。

十月二十一日、まだ発車する気配はなかった。車両には未だ空車が多かった。どこかのラーゲルから到着する抑留兵と合流して、輸送梯団を編成するらしかった。

午後、港へ荷役作業に出かけた。健康なもの三十人ほどであった。技術中隊左官班からは佐藤中尉をはじめ

め小山田、武智、横田といった顔ぶれも加わった。仕事は、穀物の入った麻袋をトラックで倉庫から運び出し、はしけに積み込む作業であった。場所はボルガの岸壁ではなく、はしけ用に作られた運河の小さな岸壁であった。トラックの上から二人が麻袋の両端を持っておろし、下で二人がそれを受け取り一人の背中に乗せる。それを背負ったものは、はしけへかけ渡した厚板を渡って船内へ入り、船内の二人がまた両端を持って積み重ねていくという手順であった。

私は、背負わされて船内へ運び込む役であった。どの仕事が好きでどの仕事が好き、という訳でもなかった。日本人のやる仕事であったが、ソ連の監視人が、少しでも仕事の速度を緩めると「ダバイ　ダバイ」を連発、けしかけてくるのには閉口した。お前らは間もなく日本へ帰るのだ、最後の仕事だ、怠けずにやれ……と、そんな態度がはつきり見えた。

麻袋の中身はライ麦のようであった。背から腰にかけてびったりと体に食い込み、足腰を押し縮めるような重量であった。初年兵の時、孫呉の歩兵砲隊で速射

砲の分解搬送をやったことがあったが、それ以来の重量を背負った感じであった。六、七十キログラムはあった。腰骨がボキッと音をたてて折れてしまうかと思われるほど、重み、苦痛は非情なものであった。はしけへ渡した厚板も、歩く度になんて腰がぐらつき、何度か麻袋もろとも運河へ落ちそうにもなったが、辛うじてその難はのがれることができた。

小さなはしけ一隻にトラックで四、五台分も積んだ。作業が終わったときは、足腰の筋肉から力が抜けてしまったようであった。苦しい仕事であればあるほど、自分だけ休むことは許されなかった。歯を食いしばって、よろめきながら全員が耐え抜いたのである。

「初鹿野よ、お前立って歩けるか。参ったな、終わった途端腰が抜けたみたいだよ」武智が眼鏡を拭きながら言った。私達は、小さな岸壁の板張りの上に腰をおろして休んだ。「俺の足腰じゃないみたいだ。よく頑張ったよ。しかし、今夜は痛むぜ」私は、武智にそういいながら、腰のあたりをもみほがしていた。

作業は二時間ほどで終わった。倉庫の方へ行ってい

た小山田達も戻って来た。どうしようもないといった、かすかな苦笑だけの表情であった。帰国の夢も空しく、異国の果てに骨を埋めた多くの同胞達、病を得て苦しんでいる人達のことを思えば、健康の者たちの当然の償いかも知れなかった。

「小山田よ、ナチャリーニークが今、捕虜の卒業証書をくれるとよ」武智が言った。「まだ卒業にはならんだらう。行った先々でコキ使われるんじゃないのか」小山田は吐き捨てるように言って座った。そして、黙ったまま一握りの穀物を私に差し出した。「何だ、小麦じゃないのかこれ」「火力乾燥してあつから妙つたみたいだ、食べられるよ」小山田はそう言ってみんなに分配し、自分でも少しずつ口にいはては、ポリポリと音をたてていた。先刻、トラックで倉庫から麻袋運び出すとき、倉庫の中に袋の破けたのがあった。それを外套の両ポケットにしこたま詰め込んできたという。小山田はにんまりと笑った。貴重なカロリー源を手にしたものである。

私も食べてみた。生のものには違いないが香ばしい

味がした。少しずつよく噛めば消化不良は起こさない。もう胃袋は野生の動物なみであった。「小麦の粒、こうしてかじるのもカザンの思い出になるか。これで足腰がしゃきんとすりゃ、安いもんだなあ、横田ンスキーどうだい」佐藤中尉が横田の方を向いて言った。

「俺はもう、くたくたや、佐藤中尉殿におんぶしてもらって帰るよ。ひどいよ、弱いもんこんなに重労働させおって……。全く……。ヤー オーチンウスタール（私は非常に疲れた）だよ。ナチャリーニーク（長）が来たら俺は訴えるぞ」横田はそう頑丈な方ではなかった。一番骨身にしてみたかも知れない。要領はいい方だが、今日の仕事は皆同じようで、特に楽な仕事はなかった。横田にしてみれば、盛んにけしかけて仕事をやらせたナチャリーニークがいまいしくて仕方がないのである。

間もなくナチャリーニークが来て、駅へ帰ると言った。横田は、わざと足を引きずって歩きながら、ヤーオーチン ウスタールを連発した。悲しい抵抗であった。私達もそれに同調して跛を引いて歩いた。同調す

るといふよりも、事実、まともには歩けなかった。

「ヤボンスキー ヴィストラ ダバイ（日本人よ、早くしないか）」ナチャリーニークはまたけしかけてきた。「ナチャリーニーク タバリシチ ムイ オーチンウスタール ハジーチトルダニー（親方よ、同志よ、我々は非常に疲れているんだ、歩行困難だよ）」佐藤中尉がびっくりするような声で言った。ナチャリーニークは、勢いをそがれたように、流し目で佐藤中尉を見、それ以上けしかけはしなかった。佐藤中尉の長く伸びた濃いあごひげと、のろのろと歩く三十人の男達のきつい視線が背後から追いかけてくることを彼は感じ取ったようであった。しばらくは、相互に相手の内面を探るかのように、無言のまま歩いた。

貨物駅の管理棟らしい建物の前まで行くと、ナチャリーニークはそこで立ち止まり、「ストーリーヤボンスキー アジナー ムニーナー アー ダバイ チュ ドヴァー（止まれ、日本人、ちょっと待ってくれ、そして二人ばかり来て下さい）」と、そう言い、前方の二人を連れて室内に入ってしまった。「やっこさ

ん、随分おとなしくなったぞ」「作業は計画通りうまくいったんだから、いつまでもむきになることはないよ」小山田が言った。「横田ンの演出、なかなかよかったぞや」佐藤中尉が相好を崩して言った。「俺、演出じゃないよ。ほんま、がたがたなんや。けどな、佐藤さんのでっかい声で、ナチャリーニークもびっくりしとったぞ」「横田さんよ、今なあ、ナチャリーニークが何しに行つたと思う……。俺はな、これを取りに行つたと思うんだ」今度は武智がゼスチャーでバンの形を作り、それを食べる格好をした。「増食か」横田は驚いた顔をした。「そうだ、今日の仕事はなあ、十分増食に値すると俺は思うんだ。小山田よ、もう小麦かじるのはやめとけよ、今、黒パンが来るから」武智は自信ありげに言った。男達は武智の言葉を半ば冗談だろうと思った。「増食なんかあるもんか、そんなこと言つてオンジ、後でみんなを失望させていいのか。それよりも、早く貨車のねぐらへ戻つて体を休ませたいよ、俺は」と、そう言つて肩をしかめた。横田は信じなかった。

だが、間もなく、ダンボールの箱に黒パンの匂いを漂わせて二人の男が出てくると、一斉に拍手が起こった。「おお、すげえぞ！」後方で喜びの声も起こった。増食の黒パンは、まだ焼きたてのようで四百グラムもある大きいものであった。仕事は予想外の重労働であったが、増食のパンも予想外であった。

男達は、増食の分配を受けると、歩きながら早速食べ始めた。外に適当な場所はないし、ここでは見栄も外聞もない。旧関東軍の将校達が、荷役作業の帰途、増食の黒パンをほうばりながら歩いていく……。疲れ切った男達の、悲しいほどの食べ物への執着、その肩から背にかけて、北国の晩秋の斜陽が淡い光芒を注いでいた。

【執筆者の紹介】

大正十年九月二十九日 茨城県筑波郡上郷村（現在のつくば市）に農家の長男として生まれる

昭和十八年九月二十三日 茨城師範学校卒業

十月一日 上郷国民学校訓導

昭和十九年三月二十日 水戸東部第三十七部隊に關

東軍要員として入隊

・満州第九八一部隊

・同 第一五二〇二部隊

・同 遼陽教育隊（予備

士官学校）

・同 ハルビン第一三一

旅団

昭和二十年八月十九日 ソ連軍による抑留

・北欧 ラーダー収容所

・同 エラプカ収容所

昭和二十二年十一月二十五日 復員（舞鶴）

上郷小学校教諭として教職復帰

以後、教諭・教頭・指導主事・校長として教職

に従事

昭和五十七年三月三十一日 退職

以来、郷土の文化活動・自治活動・老人会活動

等に参画し現在に至る

（茨城県 豊田 耕八）